

はじめに

最初に頭が見えてくる。向こうの丘のてっぺんによだれをたらした鼻^{マズル}づらがあらわれる。見えるのは頭とマズルだけだ。残りの部分はまだ見えてこない。一本の足が音を立てて視野に入ってくる。そのあと、第二、第三、そして第四の足がゆつくりと続き、六五キロの体を運んでくる。肩までの高さが一メートル、頭から尻尾まで一・五メートルもあるウルフハウンドだ。彼は長毛のチワワを見つける。背がふつうの犬の半分もないこのチワワは、飼い主の脚のあいだで草に隠れている。チワワは三キロ、どちらにも震えている。ウルフハウンドは耳をピンと立て、ゆったりとひと跳びして、チワワの前に着地する。チワワはとりすましたように目をそらす。ウルフハウンドはチワワに向かって体を折り、チワワの脇腹を軽くかむ。チワワはハウンドに視線を戻す。ハウンドは空中に尻を上げ、尻尾を高く上げて、いまにも攻撃しそうな態勢だ。一見危険なこの相手から逃げるかわりに、チワワはハウンドと同じ姿勢をとり、それからハウンドの顔に向けて跳ねあがると、小さな前足でハウンドの鼻をかかえ

る。二匹は遊びはじめる。

五分間というもの、二匹の犬はもつれあい、相手にとびつき、噛み、たがいに突進する。ウルフハウンドが体を横倒しに投げ出し、それにこたえて小さな犬のほうはハウンドの顔や腹、そして足を攻撃する。ハウンドが前足でたたき、チワワはあわてて後ずさりして、おずおずと横によける。ハウンドが吠え、とびおきて、バサッという音とともにまた四つ足で立つ。チワワはその足の一本にとびかかってきつく噛む。いまの二匹は抱擁しあっている真っ最中だ。ハウンドの口がチワワを包みこみ、チワワのほうはハウンドの顔を後ろ足で蹴っている。そのとき飼い主がハウンドの首輪にリードをつけ、引っ張ってまっすぐに立たせ、そこから立ち去る。チワワは姿勢をたてなおし、彼らを目で追い、一回だけ吠え、それから自分の飼い主のところへ小走りに戻っていく。

これらの犬たちのサイズの違いはまさに桁違いだ。まるっきり別の種のようなものである。そんな二匹のあいだでこれほど自然な遊びが見られるのが、わたしにはいつも不思議でならなかった。ウルフハウンドはチワワを噛み、くわえ、突撃する。それでもチワワのほうはおびえもせず、同じ遊びで応えるのだ。一緒に遊べるというこの能力は、どう解釈したらいいのだろうか。なぜハウンドはチワワを獲物とみなさないのだろうか。なぜ、チワワはハウンドを捕食者として見ないのだろうか。別にチワワが犬の大きさを見誤っているせいでもなければ、ハウンドのほうに捕食衝動が欠如しているわけでもない。この手の本能が配線ハードワイヤされているわけでもない。

遊びがどう機能するか。そして遊んでいる犬たちが何を思い、何を知覚し、何を言っているか。これを知るには、二通りの方法がある。犬として生まれるか、あるいは多くの時間を使って、犬を注意深く観察するかである。前者はわたしには無理だ。そこでわたしは観察し、学ぶことにした。そうやって知った事柄を、これから読者とともに見ていきたい。

わたしは犬派の人間である。

わたしの家にはいつも犬がいた。わたしが夢中になった最初の犬は、家で飼っていたアスターである。目が青く、尻尾がたれていて、夜中に近所をほつき歩く癖があった。いつもわたしは夜おそくまでパジャマを着たまま起きていて、彼が夜ふけに戻ってくるまで心配していたものだった。スプリング・スパニエルのハイディが死んだあと、わたしは長いこと悲しんだ。彼女は家の近くのハイウェイで車にひかれて死んだ。子どものころの思い出のなかで、彼女はいつも幸せそうに勢いよく走っており、舌が口のわきからたれ下がり、長い耳が後ろに吹き流されていた。大学生になったころには、家にはチャウチャウの雑種のベケットが引き取られていた。朝、わたしが学校に出かけるのを、彼女は悠然とした様子で見送ってくれた。そんな彼女を、いつもわたしは感嘆と愛情のいりまじった思いで見つめたものだった。

そしていま、わたしの足下には暖かい巻き毛のハアハアいう生きものが横たわっている。雑種犬のパンパーニッケル——パンプ——である。【パンパーニッケルとは黒いふ。すま入りのライ麦パンのこと】。彼女が生まれてからの一六年間、わ

たしがおとなになってからの全歳月を、わたしたちは一緒に過ごしてきた。五つの州で過ごした日々、大学院での五年間、そして四つの仕事——その間ずっとわたしの朝は、この犬の尻尾の挨拶から始まった。わたしが目をさまして体を動かすと、彼女はすぐに気がつくのだ。犬派の人間ならだれでもわかるように、この犬がいない人生などわたしには想像



できない。

わたしは犬派の人間であり、犬を愛している。それと同時にわたしは科学者でもある。

わたしは動物行動学を研究している。科学者として、わたしは動物を擬人化するのには慎重だ。人間がみずからを表現するのに使う感情、考え、そして欲望を、そのまま動物たちに帰するわけにはいかない。動物行動学を研究するうえでの基本として、わたしは行動を表現するための基準コトワザを教えられ、それに忠実に従った。客観的であること、より単純なプロセスで説明できるときにあえて心的プロセスに頼らないこと、そしてだれもが観察したり確認できない現象は科学の対象とはならないこと、である。現在のわたしは、動物行動学、比較認知科学、心理学を教えており、数量化できる事実に基づいた権威的なテキストを使っている。それらの本は、動物の社会的行動についてのホルモンと遺伝子による説明から、条件反応、定型動作パターン〔特定の種に典型的に見られる〕、さらには最適採餌率まで、なにかも同じ確固たる客観的トーンで記述している。

それでもやはり……とわたしは思ってしまう。

だいたいこれらのテキストは、わたしの学生たちが動物についてもっている疑問にほとんど答えていない。学会では、学者たちは必ずと言っていいほど、講演後の話を自分のベットとの経験に向けていく。そしてわたしはつねづね自分の犬について抱いてきた疑問を、いまだにもち続けている——そうした疑問が一挙に氷解することもない。動物たちと一緒に暮らし、その心を理解しようとしているわたしたちの経験に対して、テキストのなかで実践され精錬されている科学はめったに取り組もうとしないのだ。

大学院で、わたしは心、とくに人間以外の動物の心についての研究を始めた。だが最初の何年かは、犬を研究することなど一度も心に浮かばなかった。犬はあまりにもなじみがありすぎ、あまりにもわか

りきった存在だった。犬から学ぶことは何もないというのが、研究者仲間の意見だった。犬は単純で、幸福な生きものであり、人間は彼らを訓練し、餌をやり、愛してやるだけでよい——犬について考えるべきことはそれだけだ。犬にはデータなどというものはない。それが科学者たちの伝統的な考えだった。わたしの博士論文の指導教官は、ヒヒという立派なテーマについて研究していた。ヒヒは動物認知科学の分野で好まれる霊長類である。人間に近い能力と認知が見いだされる見込みがもっとも高いのは霊長類の仲間だというのが、その根拠になっている。これは行動科学における主流の見解であったし、いまもそうである。そのうえ犬の心について理論をうちたてる仕事は、すでに犬の飼い主が引き受けてしまっているようなのである。彼らの理論は、根拠のない事例と、間違った擬人化から作り上げられている。こうして犬の心という概念が汚染されてしまっているのだ。

それでもやはり……とわたしは思ってしまう。

カリフォルニアでの大学院時代、わたしはバンパーニッケルと一緒に地元のドッグパークや海岸でよく遊んだものだった。当時のわたしは動物行動学者の卵で、二つのリサーチグループに加わって、高度に社会的な動物の観察を行っていた。ひとつはエスコンデイドのワイルド・アニマル・パークにいるシロサイ、もうひとつは、同パークとサンディエゴ動物園にいるポノボ（ピグミー・チンパンジー）である。このときわたしが学んだのは、注意深い観察と、データ収集、そして統計的分析からなる科学だった。このように対象を見る方法は、やがてドッグパークでの楽しみの時間にも浸透しはじめた。犬の社会と人間の社会——この二つの世界のあいだをいともやすやすと行き来しているこれらの犬たちは、ふいにわたしにとってまったく未知の対象となった。このときからわたしは、犬の行動を単純でわかりきったものとして見るのをやめた。

パンパーニッケルと地元のブルテリアが遊んでいるのを見ても、かつてはただ微笑ましく思っていただけだったのが、いまのわたしがそこに見るのは相互の協同と、瞬時の情報交換、そして相手の能力と欲求の査定が欠かせない複雑なダンスだった。ほんのちょっと頭をめぐらすのも、あるいは鼻の向きもすべてが制御され、意味をもっているようだった。ドッグパークでわたしが見たのは、自分の犬が何をしているのかまったく理解していない飼い主と、彼らに連れられた犬たちだった。そんな飼い主の遊び仲間としては賢すぎる犬たちだ。人々は犬の要求を混乱と取り違え、喜びの行動を攻撃だと誤解していた。わたしはビデオカメラを持ち出し、ドッグパークに出かけるたびにビデオに取めた。家に戻ってから、わたしはビデオを巻き戻し、犬どうしで遊んでいるところ、そして人々が犬にボールやフリスビーを投げているところをあらためて見た。追いかけているところ、闘っているところ、愛撫しているところ、走っているところ、吠えているところ。完全に言語のない世界での社会的相互作用がいかに豊かなものとなりうるか。これに新しく気づいたいま、かつてはあたりまえに見えていた活動のすべては、まだ人の手の入らない情報の泉であるように思われた。ビデオを極度にスローにして再現することで、何年も犬と一緒に過ごしていながら一度も見なかった行動が見えてきた。たんに二匹の犬が戯れているように見えたものは、同調的行動、活発な役割交代、多様なコミュニケーション・ディスプレイ、相手の注意への柔軟な適応、そしてすばやく繰り出される多種多様な遊び行動からなる、目もくらむようなさまざまな行動の連続となった。

犬たちがたがいにコミュニケーションし、まわりの人間たちとコミュニケーションしようとし、そしてまたほかの犬や人間たちの行動を解釈している光景のなかに、わたしは犬の心のスナップショットを見ていた。

それからというもの、パンパーニッケルにしろほかのどの犬にしろ、わたしは二度と同じようには見なくなつた。だからといって、パンパーニッケルとの交流の喜びに水を差されることはけつしてなかつた。それどころか科学の眼鏡をかけることによつて、彼女の行動を新しい豊かな見方でとらえることができたのである。犬として生きるとはどういうことかを理解するための新しい見方だ。

この最初のビデオ観察からいまにいたるまで、わたしは遊んでいる犬について——ほかの犬や人間が相手だ——研究し続けている。そのときのわたしはまったく意識せずに、そのころ犬の研究に向けて科学のあり方に生まれつつあった大きな変化を体現していたのだった。変革はまだ完全ではないものの、すでに犬の研究の地平は二〇年前とは著しく違っている。かつては、犬の認知や行動についての研究はごくわずかにすぎなかつた。いまでは状況は変わっている。アメリカでも世界でも、犬についての会議や、共同研究グループ、実験的および動物行動学的研究がふえており、こうしたリサーチの成果がさまざまな科学ジャーナルに散在している。研究者たちは、まさにわたしが気づいたとおりのことに気がついた——非ヒト動物の研究において、犬は完全に対象となりうる。何千年、たぶん何十万年ものあいだ、犬は人間とともに生きてきた。彼らは家畜化という人工的選択を通して、人間の認知を構成する要素に感受性をもつようになつた。他者への注意は、その決定的なものである。

本書でわたしは、読者を犬の科学へと導くつもりである。実験室やフィールドにおいて、科学者たちは仕事犬や愛玩犬を研究し、犬の生物学——感覚能力と行動——について、さらに犬の心理学——認知——について、おびただしい情報を集めてきた。蓄積された数百にもおよぶ研究成果のおかげで、わたしたちは犬の絵を内側から描きはじめている。鼻の能力、耳が聞くもの、その目が人間に対してどう向

けられるか、そのすべての背後にある脳のしくみ。本書ではこうした犬の認知活動を述べるにあたって、わたし自身の研究に基づくだけでなく、それ以上に最近の研究の成果を要約している。犬に関してまだ信頼に足る情報がないテーマでは、ほかの動物に関する研究成果から犬の生活の理解に役立つと思われる情報を紹介している。

リードを握る手をちょっと休めて、彼らを科学的に見てみよう。そうしたからといって、犬の魅力は変わらない。犬の能力と、彼らが世界を見る見方は、特別な関心を受ける価値がある。そしてその結果は、まさにすばらしいの一語につきるのだ。科学はわたしたちを犬から遠ざけはしない。それどころか、これによってわたしたちは犬の真の性質により近づき、驚異の念を抱くことができる。厳密に、ただし創造的に使うならば、科学のプロセスとその成果は、人々が自分の犬についてふだんからしている議論——彼らが何を知っているか、わかっているか、あるいは信じているか——に新しい光を投げかけてくれる。わたし自身、自分の犬の行動を系統的にまた科学的に見るといふ個人的な旅を通して、彼女をよりよく理解し、認識し、そしてより良い関係をもつようになった。

わたしは犬の内側（インサイド）に入り込み、犬が世界を見る見方をかいまみた。読者も同じことができるはずだ。いま足下にいるその大きな毛のかたまり——その中にあなたが見るものが、いま変わろうとしている。

前もっておことわり——犬のこと、トレーニング、そして飼い主について

「KとじいもG」(the dog) yumi

非ヒト動物の研究では、まんべんなく調べられ、観察され、訓練され、あるいは解剖された少数の個体が、種全体を代表するとされる。だが人間の場合、ひとりの人間の行動を見て、それがわたしたち全員の行動を代表するものだと考えることはけっしてない。もしある人間が一時間でルービック・キューブを完成できなくても、同じようにそこからすべての人ができないという結論は出ない（だれひとりその人に敵わなかったというのであれば別だが）。この場合、個としての感覚は、共有する生物学的感覚よりも強い。身体能力や認知能力を述べる場合、わたしたちは第一に個人であり、つぎに人類の一員となる。

動物となると、順序は逆になる。科学は動物を、まず第一に彼らの種の代表とみなし、第二に個体として見る。わたしたちは動物園に飼われている一頭か二頭の動物を見て、種の代表とみなすのに慣れている。動物園にとって、彼らは知らずして種の「大使」の役割さえ果たしているわけだ。このように種のメンバーを画一とみなす傾向は、動物の知能を比較するさいにはつきりあらわれる。脳が大きければそれだけ知能が高いという説は、昔から人気があり、この仮説をテストするため、チンパンジーとサル、そしてラットの脳の容量が人間の脳の容量と比較された。案の定、チンパンジーの脳は人間のそれより小さかったし、サルの脳もチンパンジーの脳より小さく、ラットの脳になると霊長類の小脳くらいの大ささしかなかった。ここまではかなりよく知られている話である。だが驚いたことに、比較のために使われた脳はわずかに二、三頭のチンパンジーやサルの脳にすぎなかったのである。気の毒に科学の進歩の

ために脳を失うはめになったこれらの二、三頭の動物たちは、以来、サルとチンプの完璧な代表とみなされることになった。ひょっとして彼らがたまたま特大の脳をもっていたサルだったのか、あるいは異常に小さな脳をもったチンプだったのか、わたしたちにはまったくわからない。

同じように、もし一頭、あるいは小集団の動物が心理学の実験でしくじった場合、種全体が失敗の烙印を捺される。生物学的類似性によって動物をグループ分けすることは、たしかに役に立つ便法ではあるけれども、そこには奇妙な結果がつきまといってくる。なんらかの種について話すとき、その種のメンバー全員が同じであるかのようにみなす傾向がそれである。人間については、このような過ちは起こらない。だがもし一匹の犬が、二〇個のビスケットの山と一〇個のビスケットの山のどちらかを選ぶテストで後者を選んだ場合、結論はしばしば、定冠詞で述べられる。「犬」(the dog)は、大小を区別することができない——「一匹の犬」(a dog)が区別できないというのではなく。

それゆえ本書で犬 (the dog) について語るとき、そこで言っているのはこれまでに研究された犬たちのことである。多くのすぐれた実験のおかげで、最終的にはかなりの程度一般化されてすべての犬 (all dogs) になるかもしれない。だがそうだったとしても、個々の犬のあいだの違いは大きいだろう。あなたの犬は異常に匂いを嗅ぐのが得意かもしれない。あなたの目をけっして見ないかもしれない。自分のベッドにいるのが好きで、さわられるのを嫌がるかもしれない。犬のすべての行動がなんらかの意味をもつと考えるべきではないし、本質的なもの、あるいはすばらしいものとみなすべきでもない。人間同様、犬たちもまたただそうしているだけのことかときどきあるのだ。それはそれとして、わたしがここで紹介するのは、これまで知られてきた犬と、じょうもの (the dog) の能力である——あなたの犬の場合は違っているかもしれないが。

犬のトレーニング

この本は犬のトレーニング本ではない。ただし本書を読めば、知らず知らずのうちに自分の犬を訓練できるようになるかもしれない。じつは犬のほうではすでに、本の助けも借りず、人間を訓練するやり方を心得ているのだ。わたしたちが気がつかないだけなのである。そんな犬たちに追いつくためにも、この本は役に立つだろう。

犬のトレーニングに関する文献と、犬の認知と行動についての文献は、あまり重複するところはない。たしかに犬のトレーナーは心理学と動物行動学から基本的なところをつまみとって使っており、その結果はときには大きな効果をあげ、ときには惨憺たる失敗に終わる。ほとんどのトレーニングは連想学習の原理に基づいて行われる。人間を含めてすべての動物は、さまざまな出来事のあいだの連想を簡単に学習する。「オペラント」条件づけ——望ましい行動(すわる)が起こったあとで、報酬(おやつ、関心、オモチャ、愛撫)を与える——の基本にあるのは、この連想学習である。これをくりかえし適用することによって、さらに新たな望ましい行動を形成することができるわけだ——伏せることだろうと、転がることだろうと、あるいはもっと野心的にモーターボートの後ろで落ち着いてジェットスキーをやることだろうと。

だがしばしば、トレーニングの教則は犬についての科学的研究と衝突する。たとえば多くのトレーナーは、犬をどう見るか、またどう扱うかを教えるにあたり、便利なたとえとして犬を「おとなしいオオカミ」になぞらえる。だが何かにたとえるにしても、たとえる元のものについて知らなければ意味がない。のちに触れるが、科学者は自然界でのオオカミの行動についてわずかしら知らないし、現在知られている事柄も、オオカミは犬のたとえが根拠にしている従来の知識とは、しばしば矛盾しているのだ。

それに加えて、トレーニングの方法自体、科学的にテストされたものではない（テスト済みだと主張しているトレーナーもいるが）。科学的テストとは、訓練を受けた実験グループと、訓練を受けないだけである同じ生活を送っている対照グループの行動を比較して、プログラムの有効性を評価するものだが、そのようなテストを経た訓練プログラムは皆無である。トレーナーのもとに来る人々には、しばしば共通して二つの特徴が見られる。ひとつは、彼らの犬が「犬の平均」よりも「従順でない」ことであり、もうひとつはその飼い主が「飼い主の平均」よりも、それを変えたいという意欲が強いことだ。この二つの条件の組み合わせと、数ヶ月という訓練期間を考えれば、訓練のあとでその犬の行動がまったく変わるといふのはきわめて考えられる——どんな訓練だったかには関係なく。

訓練が成功するのはわくわくする経験だが、だからといってその成功が訓練方法のせいだったという証明にはならない。もちろん訓練がすぐれていたためと言うこともあり得よう。だがひょっとしてそれは幸運な偶然だったかもしれないのだ。訓練期間中ずっと犬に対して大きな関心が払われていたせいかもしれない。訓練中に犬が成熟した結果かもしれない。通りの向こうの乱暴な犬が引越していったせいかもしれない。つまり訓練が成功したのは、犬の生活のなかで同時に起きたいくつものほかの変化の結果かもしれないのである。厳密な科学的テストなしでは、これらの可能性を見分けることはできない。決定的なのは、訓練がふつう飼い主に合わせて行われることだ。飼い主が犬の役割をどう見ているか、犬に何をさせたいのかに応じて、その犬を変えるのである。その目標は、本書の目的とはまったく違う。わたしたちの目的は、犬が現に何を望むのか、犬が飼い主に何を望み、飼い主の何を理解するのかを見ることなのだ。

犬と飼い主

近年ますます強くなる流れとして、ペットが所有する存在ではなく保護されるべきものとして、また伴侶コンパニオンとしてみなされる傾向がある。時流にさとい作家たちは、「所有する／される」関係を逆にして、犬から見た「人間たち」について語る。本書では、わたしは犬の家族を「飼い主」と呼んでいる。理由はただ、その言葉が人間と犬の法的関係をあらわしているからだ。奇妙なことに、法的には彼らはいまだに財産である（繁殖価値以外はほとんど賠償価値のない財産だ。これについては読者のだれも個人的に経験しなくてすむように望みたい）。犬が人間の所有する財産でなくなる日が一刻も早く来てほしいとは思わなくても、それまではわたしは「飼い主」というこの言葉を、思惑とは無関係に、便宜的に、ほかの動機は一切なしに、使っていく。便宜的動機といえ、本書で使っている代名詞についても同じである。雌の犬について述べるとき以外は、わたしはたいてい犬を「彼」と呼ぶ。これがわたしたちにとって、伝統的に性的中立性をもつ単語だからだ。より中立と称せられる「それ（It）」は、使うわけにはいかない。このことは犬を知っている人ならだれもが同意するだろう。